

第十二回国際仏教学会に参加して

ロバート・F・ローズ

一九九九年の八月二十三日から二十八日のあいだ、世界中から二百五十人以上の参加者を得て、スイスのローザンヌ大学で第十二回国際仏教学会(The XIIth Conference of the International Association of Buddhist Studies)が開催され、私を含む九十六人の研究者が研究発表を行った。以下、この学会について簡単に報告する。

一

国際仏教学会は一九七〇年代の後半にナライン(A. K. Narain)教授を中心として、アメリカのウイスコンシン大学で結成された。この学会は、その機関紙であるJournal of the International Association of Buddhist Studiesを毎年二回発行するとともに、原則として三年に一度の割合で、ヨーロッパ・アジア・北米の順で、国際学会を開催している。前回の第十一回大会は一九九四年にメキシコ・シティーのメキシコ大学で行われた。

今回の大会開催地のローザンヌは、レマン湖畔に位置する、

人口十二万の美しい町である。周知のように、スイスは大きくドイツ語圏、フランス語圏とイタリア語圏に分かれるが、ローザンヌはフランス語圏に位置し、日常会話はすべてフランス語で行われていた。市の中心には十三世紀に建設されたノートルダム大聖堂が立ち、それを取り囲むように中世のたたずまいを残す旧市街が広がっている。ただし、この町はレマン湖から山にかけての急斜面に立てられているため、坂が多く、特に市の中心と湖畔のウシー駅を結ぶメトロ(地下鉄)では、急勾配を登る登山列車が走っているほどであった。

現在、ローザンヌ大学自体は、旧市街に残る医学部を除いて、都市中心部よりメトロで十分ほどの郊外に移転している。近代的で洒落たキャンパスは、広大な森に囲まれ、ヨーロッパの大学というよりは、アメリカの大学を思わせる。以前この大学では『フランサバダー』のフランス語訳(部分訳)で知られるジャック・メイ(Jacques May)教授が教鞭を取られていたが(メイ教授は今大会の名譽会長として活躍された)、今ではトム・ティレマン(Tom J. F. Tillemans)教授やヨハネス・ブロンクホルスト(Johannes Bronckhorst)教授が仏教学とインド学の授業を担当されている。

今回、六日間の学会期間中、四十四のパネルやセクションが開かれた。やや煩雑であるが、それらをすべて挙げておくことにする。

八月二十四日(午後)

Recent Works on Vinaya Studies (律に関する最近の研究)

Conservative and Evolutionary Elements in Buddhist Tantra Literature (Part 1) (密教における保守的要素と発展的要素 [第一部])

Abhidharma (アビダルマ)

Buddhist (Hybrid) Sanskrit (仏教「ハイブリッド」サンスクリット)

Logic and Epistemology (論理学と認識論)

East Asian Buddhism (東アジアの仏教)

八月二十五日 (午前)

Buddhism in the West (Part 1) (西洋における仏教 [第一部])

Conservative and Evolutionary Elements in Buddhist Tantra Literature (Part 2) (密教における保守的要素と発展的要素 [第二部])

Antarabhava (中有)

Early Buddhism (初期仏教)

Mahāyānasūtras (大乘経典)

East Asian Buddhism (東アジアの仏教)

Logic and Epistemology (論理学と認識論)

(午後)

Electronic Texts, Internet and Computer Resources in Buddhist Studies (Part 1) (仏教研究における電子テ

キスト、インターネット、コンピュータの資源 [第一部])

Buddhist Logic: the Function of Examples (dīṣṭānta) (仏教論理学—dīṣṭāntaの役割)

The Value of Nature in Buddhism (仏教における自然の価値)

Buddhism and Brahmanism (仏教とバラモン教)

Mahāyānasūtras (大乘経典)

Buddhism in Tibet and Nepal (チベットとネパールの仏教)

Aspects of Buddhism in South Asia (南アジア仏教の諸相)

八月二十六日 (午前)

Buddhism in the West (Part 2) (西洋における仏教 [第二部])

Electronic Texts, Internet and Computer Resources in Buddhist Studies (Part 2) (仏教研究における電子テキスト、インターネット、コンピュータの資源 [第二部])

New Discovery of Early Buddhist Manuscripts (1) (新しく発見された初期仏教の写本 [第一部])

Round-table: The Cult of Vaiṣṇava (Part 1) (大日如来信仰 [第一部])

Madhyamika and Yogācāra (中観と唯識)

What is Sūtra? Reflections on the Material Culture of Buddhist Sūtras in China and Japan (経典とはなにか — 中国・日本における仏典の物質的文化について)

Buddhism in Tibet and Nepal (チベットとネパールの仏教)

Pali and Theravāda Tradition (パーリと上座部仏教の伝統)

Philosophy (哲学)
八月二十七日 (午前)

Early Mahāyāna and Mahāyānasūtras (Part 1) (初期大乘へ大乘経典 [第1部])

Round-table: The Cult of Vairocana (Part 2) (大日如来信仰 [第2部])

Buddhism and Society in South and Southeast Asia (南アジアと東南アジアにおける仏教と社会)

Buddhist Psychology (仏教心理学)

Japanese Buddhism since the Seventeenth Century: The Quest for Sectarian Identity (十七世紀からの日本仏教 — 宗派的アイデンティティーの探究)

Philosophy (哲学)
Vinaya (律)

(午後)
Early Mahāyāna and Mahāyānasūtras (Part 2) (初期大乘と大乘経典 [第2部])

Buddhism and Pure Land (仏教と浄土)

Tathāgatagarbha (如来蔵)

Is There a Real Distinction between Svatantrika and Prāsāngika Mādhyamika? (スヴァータントリカ中観派とプラサンギカ中観派のあいだには本当に区別があるのか)

Contemporary Buddhism (現代の仏教)

Pali and Theravāda Tradition (パーリと上座部仏教の伝統)

八月二十八日 (午前)

New Discovery of Early Buddhist Manuscripts (Part 2) (新しく発見された初期仏教の写本 [第2部])

Buddhist-Daoist Interaction in Traditional China (前近代の中国における仏教と道教の相互の影響)

以上のパネルの外に、最終日には Buddhist Reductionism and the Philosophy of Derek Parfit (仏教還元主義とデレック・パーフィットの哲学) という特別パネルが開催された。パーフィットは、最近の西洋哲学の問題提起を受けて、人格 (personality) を否定した立場から倫理学を再構築しようと試みているアメリカの倫理学者である。彼の思想は日本でも注目されているようであり、その主著である Reasons and Persons は、つい最近『理性と人格』の題名で邦訳されたが、西洋の仏教学者のあいだでも、個々の人間は確乎たる不変な人格

を持たないと言う彼の主張は、仏教の無我論に通じるものがあるとして、しばしば話題になっている。今回の特別パネルも、IAS主催者の一人がパーフィットの著作を読み、是非それについてパネルを開催したいと願い、実現したものであると後に聞いた。

さらに、参加者の交流の場として、学会期間中、いくつかの社交イベントが開かれた。二十五日の午後には、ローザンヌ郊外にあるチョコレート工場やスイス最古の修道院として名高いロマンモティエ (Romannétien) へのエクスカーションが実行され、その晩には豪華なホテル・ド・ラ・ペ (De la Paix) でパーティが開かれ、二十八日の晩には、お別れパーティとして、貸し切りの遊覧船でルマン湖のクルーズと船上のディナーが開かれた。

二

上に挙げた一覧表でも分かるように、この学会では、パーリ仏教、上座部仏教、律蔵、アビダルマ、大乘経典、密教、チベット仏教、仏教論理学など、極めてオーソドックスなテーマを取り上げたパネルが多く見られた。しかし、パネルの中には、従来はあまり注目されなかったが、今後の仏教研究でますます重要になるであろうテーマを取り上げたものがいくつかあった。例えば、環境問題を仏教の視点から究明した *The Value of Nature in Buddhism* (仏教における自然の価値) とは、マンブルグ大学のランベルト・シュミットハウゼン (Lambert

Schmihausen) 教授、京都大学の荒牧典俊教授、関西医科大学のフロリン・デレアヌ (Florin Delaunay) 教授や九州竜谷短期大学の山部能宜教授などが、それぞれの見解を発表し、多くの人々の関心をよんだ。また、東洋学園大学のチャールズ・ミューラー (Charles Muller) 教授とスミス大学のジェミー・ハバード (Jamie Hubbard) 教授によって召集された *Electronic Texts, Internet and Computer Resources in Buddhist Studies* (仏教研究における電子テキスト、インターネット、コンピューターの資源) では、二十五日の午後と二十六日の午前の二つの時間帯にわたって、コンピューターやインターネットを、仏教を研究する上で、どのように利用することができるか、様々な意見や実例が報告され、大きな成果を挙げた。また *Buddhism in the West* (西洋における仏教) のパネルでは、最近、特に関心がもたれている西洋への仏教の伝播の状況が取り上げられ、フロリダ、南アフリカ、スイスやオーストラリアなどで、仏教がどのようにに受容され、信仰され、実践されているか、具体的な報告がなされた。何れも、仏教学の新しい課題を提供したパネルとして注目されるべきものである。

また、大谷大学仏教学科の教員三名も、この学会に参加して研究発表を行った。吉元信行教授は、*Early Buddhism* (初期仏教) のパネルで “*The Manuscript of the Sutra-piṭaka kept in the Orani University Library*” (大谷大学所蔵 *Sutra-piṭaka* の写本) と題して、大谷大学図書館が所蔵している貴

重要な貝葉写本の一つである *Suṭṭa-piṭaka* について詳しく紹介された。また宮下晴輝教授は、二十六日に設けられた *Dharmosophy* (仏教哲学) のパネルで、説一切有部の三世実有説を克明に論じた “Vasubandhu's Standpoint in Opening the Problem of Sarvastivāda” (世親が三世実有の問題を論じ始めるにあたって取る立場) を発表し、注目された。筆者も *Buddhism and Pure Land* (仏教と浄土) のパネルで、鎌倉浄土教の重要な先駆者である永観律師の教学について “Yōkan's Interpretation of Nembutsu Practice” (「永観の念仏観」) を発表した。本学の仏教学科スタッフの中で、三人もが海外の仏教学会で研究発表を行ったのは、今回が初めてであって、大谷大学へも国際化の波が確実に押し寄せてきていることを実感した。また、昨年まで大谷大学特別研修員であった畝部俊也氏 (現在種積院大学非常勤講師) も、宮下教授と同じパネルで “Jñānaśrībhaddra's Interpretation of Bhartṛhari as found in the *Laṅkāvatāra*” (*Laṅkāvatāra* に見られるバルトリハリの言葉に対するジュニヤーナシュリーパドラの解釈) を発表した。

三

以上、ローザンヌの国際仏教学会について、概説的な事柄を簡単に記した。先に述べたように、今学会では、四十四ものパネルが設けられていて、それらを全て聴講する事は到底不可能であった。そこで、以下、私が出席したものの中から、特に興

味深かった二つのパネルについて報告したい。

まず、今回の学会で最も注目されたパネルの一つは、二十六年の午前に開かれた *New Discovery of Early Buddhist Manuscripts* (新しく発見された初期仏教の写本) であった。発表者はイェンス・ブロールヴィック (Jens Braarvig) 教授、イェンス・ウヴェ・ハルトマン (Jens-Uwe Hartmann) 教授、松田和信教授とローレ・ザンダー (Lore Sander) 教授の四人であった。このパネルは、最近アフガニスタンのバミヤン地方で発見された、所謂スコイエン・コレクション (Schøyen Collection) を紹介するために設定されたものであった。スコイエン・コレクションはノルウェイの実業家マールティン・スコイエン (Martin Schøyen) によって収集されたものであるが、その中には二世紀に遡る『八千頌般若経』を初め、カローシュティーやブラフミー文字で書かれた多くの貴重な写本が含まれており、さらにはバクトリア語 (ギリシャ語) で記された仏教文献も二点含まれているという。現時点で判明している文献は、すべて仏教文献であり、その中には『八千頌般若』以外には『法華経』や『勝鬘経』などの大乘經典や小乗の『大般涅槃経』(しかしその所属の部派は確定できない) などがある。これらの写本はバミヤン渓谷にある仏像を安置した洞窟の中から発見されたと報告されているが、それら写本が僧院の経蔵の一部であったのか、或いはイスラムの侵略にさいして、この洞窟に隠されたのか、または不要なものとして洞窟に捨てられたのか、全く分からないと説明された。

四人のパネリストの報告の中で、特に興味を引いたのが松田教授の発表であった。松田教授は、このコレクションの『勝鬘經』写本の研究を担当しているが、この『勝鬘經』と同一セツトの写本のなかには『新歳經』、『諸法無行經』と『阿闍世王經』が含まれている。大乘經典の『勝鬘經』と阿含經典の『新歳經』が、何故、同じセツトの文獻に収められているかは謎であるが、とにかく、これらの四文獻は、従来原典の知られていなかった貴重な写本である。なお、スコイエン・コレクションについては、松田教授が一九九九年五月発行の『東洋學術研究』三十八巻一号で、「ノルウェーのスコイエン・コレクションと梵文法華經斷簡の発見」のなかで詳しく紹介しておられるので、それを参照されることをお勧めする。

オースドックスな文獻学とはやや趣が異なるが、大乘經典とその教義を様々な角度から思想的に考察した *Early Mahayana and Mahāyānasūtras* (初期大乘と大乘經典) も、大きな刺激を受けたパネルの一つであった。発表者は全部で五人であったが、最初のフローリン・デレアヌ教授(彼は先に挙げた「仏教における自然の価値」のパネルでも発表したが)は、“A Preliminary Study on Early Mahayana Meditation and its Sitz im Leben” (初期大乘の禪定とその背景) で、初期大乘經典に見られる禪定とその思想的役割について詳しく論じられた。また、ミシガン大学のルイス・ゴメズ (Luis O. Gómez) 教授は、“Two Ratnakūṭa Texts on the Purified Buddha-field” (『宝積經』二つのテキストに見られる浄められた仏国土) と

いう発表で、『宝積經』に収録されている『文殊支利授記会』と『無量寿如来会』を取り上げ、これらの二つのテキストが同一の『宝積經』に含まれながらも、前者が後者を厳しく批判している点に注目した。つまり、『文殊支利授記会』では文殊が未来に浄土を建立すると説いているが、その浄土の素晴らしさを強調するために、それを阿弥陀仏の極楽世界と対比して、様々な点で文殊の浄土が阿弥陀の浄土より遙かに優れたものであると力説している。このペーパーでゴメズ教授は、このように同一文獻に緊張関係を持つ二つのテキストが挿入されたことの意義について考察された。

次に発表したニュー・ジールランドのカンタバリー大学のポール・ハリソン (Paul Harrison) 教授は“On the Authorship of the Oldest Chinese Translation of the *Larger Sūhvat-vyākṛā*” (無量寿經の最古の漢訳の訳者について) を発表した。周知のように、現在五種類の漢訳無量寿經が残されているが、そのなかで、最古の訳は支謙訳とされる『大阿弥陀經』と支婁迦讖訳とされている『平等覺經』とである。これらの訳者について、従来から疑問視する説もあり、藤田宏達博士は『大阿弥陀經』を支謙訳と認めながらも、『平等覺經』は帛延の訳によるものとしている。そこでハリソン教授はこの二訳の綿密な比較研究を行い、両者には全く同一の部分をもく持つことに注目し、次のように断定された。つまり、『大阿弥陀經』と『平等覺經』は本来、一つの訳であって、なんらかの理由でそれに改訂が行われ、改訂されたテキストと無改訂のテキストが、

それぞれ異なる訳として伝播されるようになった、と。そしてその訳者は支婁迦讖であると考えられることも、つけくわえられた。

三十分の休憩の後、インディアナ大学のジャン・ナティエル (Jan Nattier) 教授の発表 “Arhats in the Pure Land: A New Look at the Place of the Śrāvaka Vehicle in Early Mahayana Texts” (浄土の阿羅漢―初期大乘における声聞乗の位置についての再検討) が行われた。一般に大乘仏教では、すべての衆生は成仏すると説くと考えられているが、教授によると、それは『法華経』の一乗思想の影響のもとで形成された通念であり、多くの大乘経典は声聞・縁覚・菩薩の三乗を肯定する立場を取っている。さらにナティエル教授は Uḅra-pari-prccha や Aksobhya-vyakarana などの大乘経典に見られる声聞觀をとりあげ、前者では、菩薩は声聞が阿羅漢になるように手助けをする義務がある、とまで説かれていることを挙げ、大乘経典でも声聞乘を決して否定してはいないことを力説された。また、なぜ阿弥陀仏の浄土に声聞がいるのかという問題が取り上げ、この問題は、大乘仏教が声聞道を否定すると考えられている時においてのみ問題になるので、『大乘ニ声聞の否定』という潜入觀を取り除けば、逆に声聞が浄土に存在して、そこで阿羅漢果を得ても当然であることが理解できるであろう、という結論を導き出して、教授は発表を終えられた。

最後にバンコクの PTS 貝葉収集班学芸員のピーター・スキリング (Peter Skilling) 教授は “Dependent Origins: Reflex-

tions upon the Relationship between Mahayana and Śrāvaka Scriptures (相依相待の起源―大乘経典と小乗経典の關係について) のなかで、多くの学者はいわゆる小乗仏教と大乘仏教との關係を、本・末の關係で理解しようとしているが、それは不適当であり、大乘は決して小乗仏教と独立した形で発展したのではなく、並行して、互い影響しながら発展したことを、いくつかの具体例を挙げながら論じられた。

四

以上のように、様々な興味深い発表を今回の学会で聞くことができたが、それと同時に、多くの旧友と再会し、新しい学友に出会うことができたことも、この学会に参加した大きな成果であった。特に一日の研究発表が終了した後の夕食の時間は、楽しい思い出をたくさん残してくれた。安くて庶民的な料理で知られるカフェ・ロマンド (Café Romand) で、何人かの先生たちと一緒に現地のワイン (ルマン湖の付近はラボー、ラコートやシャブレールと呼ばれる三種類の飲み易いワインの産地として知られている) とチーズ・フォンドゥをいただき、その後で夜のレマン湖へ足を運び、湖上にうつる満月を眺めたことは、今でも忘れられない。しかし、何といっても一番記憶に残るのは、二十七日の晩にローザンヌ・パレス・ホテルでいただいたフランス料理である。このホテルからの展望はすばらしいと聞いていた私たちは、予約がないにもかかわらず、七人のグループでこのホテルを訪れた。ホテルのテラス・レストラン

に一歩足を踏み入れると、そこにはレマン湖とその向こうに聳える山々が見渡せる、すばらしい光景が広がっていた。席に着き、飲み物を注文しているあいだにも、あたりが徐々に暗くなり、レマン湖とその彼方の山々が、まるで墨絵に描かれた風景のように見えてきた。そして前菜を味わい、甘く仕上げた兔料理が運ばれてきたころには、日が完全に暮れ、真っ暗になったレマン湖の向こうのエビアンの町に光が灯され、なんともロマンチックな雰囲気醸しだされていた。愉快な仲間と仏教について論じたり、一般的な世間話に花を咲かせるうちに、つい時間を忘れてしまった。

なお、次回の第十三回国際仏教学会は、三年後にバンコクで開催される予定である。必ずしも世界中の仏教学者による示唆に富む発表や白熱する議論が展開されるであろう。今から楽しみである。